
影猫（かげねこ）

彦星こかぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かげねこ
影猫

【Nコード】
N8687B

【作者名】
彦星こかぎ

【あらすじ】
影の中で暮らす黒猫「影猫」。そしてそんな奇妙な生き物に出くわした、受験を控えた高校生に優しい女子中学生、はたまた吸血鬼に聖職者。そんな短編オムニバス。

俺の受難・前編

大体、黒猫というのは、往々にして凡庸な男とは相性が悪いものだ。

といっても俺はまだ高校生だから、自分を凡庸だと認めるにはまだ早いかもしれない。けれど、とりたてて特殊な点がないのも事実だし、結局将来は納まるところに納まってしまうのだろう。黒猫だって、正直好きじゃない。

ともかく、それはまだ秋のさなかの頃だった。

その日も俺は友達と別れて、住宅街を歩いて家に向かっていた。俺の家は高台にあって、その丘の中腹にある公園からは街がよく見える。上から見た町は小さな家の屋根が不規則に並んでいて、その隙間から病院や小学校が突き出ている。

夕日は海に沈む。

空は一面、深いオレンジ色に塗り込められていた。海面や家々の屋根は軒並みその光を反射して、同じ色に染まってしまっている。その一方で背の高いビルや倉庫は陰になって真っ黒に塗り潰され、直線的な外観が際立っている。

世界が二色になったようで、俺はひどく気味悪い印象を持った。

いつもと違う世界は得体が知れず、なんとなく不安感を覚える。毒々しいオレンジも目に痛い。早く歩き去ってしまいたいが、なんとなく俺は公園の前で足を止め、その光景を見ていた。

少し目線を手前に移せば、ごく狭い公園の中もすべてオレンジ色だ。一方で立ち木は枝先まで黒々として、しかも長い影を公園全体に落としている。それが遊具やベンチの影と重なり、オレンジ色の地面に綾を作って、俺の足元にまで至っている。おそらくは俺の横顔も、夕日に染められてしまっているのだろう。そして反対側の道路もま

た色づき、フェンスや木の影と混じって俺の影が不気味に長く伸びている……俺はそれを、首を反対に向けて何気なく確認した。やはり薄気味が悪いので、顔を戻して歩き出そうとしたとき、俺は妙な違和感に襲われた。

何かが変だ。

俺は再び、首を回した。しかし、やはりそこはオレンジ色に染まっ
てはいるもののいつもの道路で、長く伸びた影もさっきと変わら
ない。

沈んでいく夕日は徐々に赤みを増し、黒い木々もざわざわと枯れ
た音で騒ぐ。なんともいえない嫌な感じに襲われて、俺はそのまま
首を戻した。そして今度こそ歩き出そうとしながら、先程見た背後
の景色を頭の中に映し出していた。

不意にそこで、違和感の正体に気付いた。

何故か……俺の影だけ黒色が濃い。

とっさに俺は肩を捻り、自分の影に目をやった。

一瞬後には自分の行為に激しく後悔したが、既に俺の目はそこに
至っていた。

そのとき、俺の影は他とそう変わらない色をしているように見え
た。

確かに、影の色は。

しかし……俺は小さく息を呑んだ。

俺の影の上に、一匹の黒猫が座っていた。

黒猫はそれなりに大きくて、健康そうで、毛並みも良くて……し
かしその毛は、さっきまでの俺の影にそっくりな色だ。黒い。どこ
までも黒い。そんな奴が、俺の影のど真ん中に鎮座しているのだあ
る。そいつの目は黒猫らしい黄色だったが、決して爛々と輝いてい

たりはしなかった。むしろ毛に埋もれそうな細目で、眠そうな印象ですらある。しかし、そんな目でも、俺を胡散臭そうにじっと見ていることに変わりはない。

そして次の瞬間、黒猫は小さく口を開けて、やけに瑞々しいピンク色の舌を見せながら

「みゃ」

とだけ呟いたかと思うと、するすると俺の影の中に消えていってしまったのである。

そして俺の影は、道路に長く、長く、黒々と伸びていた。

一応言っておくが、俺は猫に恨みを買うような真似は一度だってしていない。ついでに言えば、人間相手でも心当たりはない。

しかし、理屈はどうあれ、その黒猫は俺の影に居座ることにしたらしい。

影が、なんとなく濃いのだ。

晴れた日には恐ろしく黒々しているし、曇りの日でも俺の影だけ妙に輪郭が分かる。あからさまに目立つようなことはないが、気がつくとも視界に飛び込んでくる。それだけのこと、とも言えるが、足元から這い登ってくるような気味悪さがあった。誰かの目に留まっている様子もないが、それだけに相談も出来ない。

俺は影を極力見ないようにしたが、それでもその薄気味悪い暗闇はしつこく俺の視界に入り込んできた。徐々に自分が苛立ち、神経を尖らせてしまっているのが分かる。ぐっすり眠れない。

そしてそれは、受験生である俺にとって未曾有の大惨事を幾度となく引き起こした。もとの睡眠時間があまりにも足りないのだ、集中力が途切れた瞬間に意識を失ってしまうのだ。大事な授業で眠り込んでしまい、あとで参考書を片手に四苦八苦したことも一度や二度ではない。

あるときは模試の最中に意識を飛ばしてしまった。見かねた先生が

肩を揺すった所、脱力しきった俺はそのまま崩れ落ちるように床に倒れた……らしい。保健室で目覚めた俺は、その大騒動の様子をそれぞれの友達から一度ずつ聞く羽目になった。しかし、結局俺の体には何の異常もなく、単に眠っていたただけだったらしい。時間が中途半端だったがために再試験も受けられず、俺は大事な模試をまるごと逃す形になった。

俺がいらいらすればするほど、黒い影は視界に居座り続けた。

しかし黒猫はあの日以来、影の中に入ったきりで、一度も俺の前に現れはしなかった。

終業式の日、雪になった。

俺は散々な模試の結果をどう言い訳しようか考えながら帰宅していた。

というか……今日は、白い。街がとんでもなく白い。

空もどんよりして白っぽいし、すっかり積もった雪は踏みつけてもアスファルトを表出させない。勿論、その辺の塀のような垂直面には雪が積もっていないわけだが、元々そんなに色鮮やかなものではないし、どちらかといえば白っぽい。植木だって全部灰色だし、雑草だって枯れている。

この分ではホワイトクリスマスは確実だろう。そんなことを思っ
て歩いていた俺に、

急激な睡魔が襲い掛かった。

すうつ、と意識が真っ白い中に遠のいていく。のけぞって倒れそうになり、思わず俺は前向きに腰を曲げた。それでも眩暈はどうしようもなく、俺はふらつく足取りでゆっくりと歩き始めた。どこかで休みたい。出来たら早く眠ってしまいたいが、路上ではそうもいかない。そうこうしているうちに、頭の中は白い霧で覆われ始める。だんだん、自分の判断力が怪しくなっていくのが分かる。

それでも足だけは、何とか前に進めた。もう少し行けば例の公園がある。ベンチに座って休めば回復するかもしれないし、運よく誰かいれば助けてもらえる。

辿り着いた公園は、あいにく人影もなく、やはり真っ白だった。それでも俺は、どうにかベンチまで近寄ることが出来た。座れる……休める。

そう思い、安心感を覚えた次の瞬間、睡魔は一気に俺の頭を真っ白に染めた。思考が止まり、雪を払うことも出来ないままにベンチに崩れ落ちる。

異常だ。いくら睡眠不足でも、こんなに眠くなるはずがない。それはきちんと理解していたが、どうすればいいのかも分からず、俺はずるずると眠りの中に引きずり込まれていきつつあった。

しかし、寝るにしても、雪の上では環境が悪すぎる。凍死する。ぼんやりした頭で辛うじてそう考えた俺は、今度こそきっちり横になるべく、眩暈を振り切って体を起こした。

目を落とすと、俺の真下には黒々とした影が横たわっていた。

俺の受難・後編

眩暈は納まらないし、睡魔も消えない。しかし俺の頭の一部分だけははつきりと目が覚めて、俺にダイレクトな恐怖を訴えかけた。

こんなに曇っているのに、影はあまりにも黒い。見ていると、影は雪上に流した原油のように半ば盛り上がって、しかも微妙に波打っている。俺の背中が一度、大きく痙攣した。俺は、この得体の知れない影の中心部にいるのである。しかし頭の中はほとんどホワイトアウトしていて、体だって俺の意思では動いてくれそうにない。

たぶん、絶体絶命の危機なのだろうが、半分眠ってしまった俺はほとんど何も出来ないし、正直何も考えていない。さっき起こした上半身も、徐々に徐々に沈んでいく。とりりとした黒い影の上に、俺の手が乗り、肘から下が乗り、そして肩までも、真っ黒なベンチに預けてしまう。頭の一番奥は既に真っ白で、そこから乳白色の煙があちこちへ行き渡っていく。頭は真っ白……視界は真っ黒。

もし、あのとき無理に体を起こしたりしなければ、俺は今頃安眠できていただろう。

しかし、俺は欲求に逆らって目覚めようとしてしまった。おかげで俺は自分の意識が危ない方向に遠のくのも自覚してしまい、秋からおかしなことになっている俺の影がいよいよ恐ろしい状態になったのも見てしまったのだ。全てが安眠の中で行われたなら放置も出来るが、この状況では最後まであがくより他にない。とりあえず、物理的に危ない気がする影の方を何とかしなくては。

俺は死力を振り絞って、まず大きく寝返りを打った。俺の体が地面に、派手な音を立てて転がり落ちる。そしてそれに引っ張られるような形で、俺の影もベンチからずり落ちた。これでようやく、俺は影の中央からは逃れられる。それから次にどうしよう……残り少ない思考回路をフル回転させる俺の頬に、ずっと光が当たった。

太陽だ。真っ白だった曇り空に隙間が出来て、青い空と輝く太陽が、横向きに地面に転がった俺の目に飛び込んできた。その一瞬、頭を覆った白が遠のく。同時に俺は、突拍子もないことを思い出した。

俺は首をよじらせて、まだ半ばベンチに引っかかってあたふたしている影を、じっと睨みつけた。一旦目を閉じたかったが、いつ意識が消えるか分からない今は無理だ。影は俺の視線に気付いたのか、動きを止めた。俺は絶対に目を動かさないように全神経を顔と頭に集中しながら、ゆっくりと数を数え始めた。

一……二……三……

俺の意識は数字だけに絞られたので、残りの思考は瞬く間に遠ざかって、白い煙の中へと消えていった。

五……六……

俺の頭をあつというまに占拠してしまった白い塊は、脳内でカウントを続ける数字と硬直した視神経を手中に収めるべく、触手のような煙をうごめかせる。思い浮かべた数字に、白く霞がかかり始める。それを必死に振り払いながら、俺は必死で影を睨みつけた。気を抜くと眩暈に侵食されかねない。あと少し、もう少し……

九……十。

俺は残った力の全てを使うつもりで、再び全身に力を行渡らせ、一気に仰向けに転がった。

と同時に、頭の中の白い靄が、何故か、すーっと遠ざかって消えていった。

雲の切れ間の青空に、真っ白い俺の影……俺はそれが残像だと知っているのだが……が、ぽっかりと浮かんでいた。

「うっわ……、懐かしー……」

頭痛と眩暈は完全に治まったが、俺はそのまま雪の積もった地面に寝転がっていた。体力を無駄に消費した感じた。

ふと気配を感じて視線を真横に移すと、そこには……あの黒猫がいた。性格の悪そうな細目で、俺の方をちらっと見る。

「お前……」

黒猫は、どしっと座って前足を舐め始めた。

そういえばさっき、俺の影はただうねっていただけで俺に危害は加えていない。俺の体調が回復したのも、頭を侵食していた白い靄が抜けたからのようで、結局あっちが原因だったのだろう。

「あの白いの、たまに抜いてやらないとまた頭に溜まるぞ」

突然の声に俺は顔を動かしたが、そこでは黒猫が丁寧に毛繕いをしているだけだった。急に動いた俺に気付いて、またぞろ胡散臭い目を向ける。

……そういえば、空をまっすぐ見上げるのは久々だった。

くだらなくて古い遊びをするのも、ひよっとしたらこんなにくすきりした気分になるのも、凡庸な俺は忘れていたらしい。

再び視線を横に向けると、黒猫は悠々と立ち上がって、白い雪の中を歩き去って行くところだった。

「おい」

俺は、思わず声をかけた。黒猫が振り向いて、俺を睨む。

「俺の影に住みたきゃ、別に住んでもいいんだぞ」

そんな俺の言葉に、

「ふや」

黒猫は、ほとほと呆れたとでも言いたげに一啼きしてから、あっという間にどこかへ行ってしまった。

私とドルシェ・前編

あの寒い夜から、私の影の中に、一匹の猫が住んでいる。

真っ黒な体に、光る目。たいして大きくないその猫は、影の上でいつも気ままに過ごしている。

すまして座るとスマートに見えるけれど、性格はなんだか子供っぽい。私とはお喋りも出来るけれど、たくさん話すのは好きじゃない。

私はその猫に、「影猫のドルシェ」という名前をつけた。

実物より随分立派だけれど、ペットみたいな可愛い名前も失礼のような気がしたのだ。

ドルシェは私が名前を作ったことをひどく面白がった。

「へーえ、……俺はドルシェなのか？」

「えっ？ ううん、嫌ならいいんだけど」

「嫌じゃないさ……うん、嬉しい。あー、でも……そうか、俺ドルシェなのか……」

ドルシェはくすぐったそうにお腹を見せて、影の上を散々転がったかと思うと、

「面白い」

ぴたっと動きを止めて、満更でもないように私の方を見た。大きな瞳が、笑っていた。

ドルシェは夜が好きだ。

昼間は大抵、眠っている。

太陽の下では私の影もくっきりしているから、何も心配せずに眠れるらしい。眠っているとドルシェは影の中に消えてしまっ、私からはまるで見えなくなってしまう。寂しい気もするけれど、昼間は私も忙しいから、煩わしくなくていいのかもしれない。

遅くとも私が寝る支度を終える頃には起きてきて、気紛れに遊んだり話したりする。時にはパジャマ姿の私を庭に誘ったり、ベランダ伝いに屋根まで上らせたりする。

それから私が寝てしまうと、ドルシエは真っ暗な部屋で自由に過ごす。街へ出ることもあると言うけれど、日が昇る前には戻ってきて、私が朝どんなにばたばたしても気にしないで眠っている。

その日、ドルシエはいつもより早く起きてきた。

私はちょうど塾から帰るところで、ひとりで大通りを歩いていた。人がいない時間帯で、車道も歩道もしーんとしていた。広い道を、均等に並んだ街灯が冷ややかに照らしていた。

ドルシエはすぐに遊び始めた。

街灯に近づくほど、私の背後に伸びる影は濃く短くなっていく。ドルシエはそれに合わせてリズムよく私の方に近づいて、私が街灯を通り越すと同時に狙って私の前にぴょん、と出る。街頭から遠ざかるにつれて、影は薄くなっていく。けれど、背後には次の街灯で出来る新しい影が伸び始める。前側の影が消える直前に、ドルシエは私の足の下をしゅつとすり抜けて背後に戻る。その勢いのまま影の端まで行ったら、新しい影が短くなるのに合わせてまた前へ歩いてくる。

「上手だね、ドルシエ」

実際ドルシエは一度もタイミングを外さなかったし、私に触れることすらなかった。

「へへっ」

ドルシエはそれだけ言って、また遊びに熱中し始めた。

街灯を一つ過ぎて。ドルシエが一つ跳んで。また街灯を過ぎて。気がつくと、私はあつという間に大通りを通り過ぎてしまっていた。人気のない夜道もまるで気にならなかったし、長い距離を歩いてきたようには思えなかった。

ちよつと緊張が緩んで、私は一息ついた。

そこからは路地に入って真っ暗なので、私は渡されていた懐中電灯をつけた。暗闇の中に、オレンジ色の光線が一筋加わる。それから、眩しい光があと二つ……ドルシェの目だ。

ドルシェはこっちを見たり懐中電灯の光を追ったりしていたが、不意に私のほうに駆け戻ってきて、するすると肩まで登った。頬に当たる黒いひげがくすぐったい。

「どうしたの？」

「ううん……ただ、あんまり真っ暗だから、見失ったら嫌だと思っ
てさ」

それが「私がドルシェを見失ったら」なのか「ドルシェが私を見失ったら」なのかは分からなかったが、とりあえずドルシェは、今のところは私と一緒に帰りたいらしい。

左肩だけ妙に暖かくなって、私は家に帰った。

ドルシェが一番嫌いなものは、雨だ。

朝から雨が降っていたりすると、私がまだ学校にいる頃から気分悪そうに動き出す。ゆっくりした動きで、しかも半分眠っているの
で、誰も気付かないし私も気にならないが、当人（当猫）はひどく
苦しそうな様子を見せる。

一度、午後から急に大雨になったのに、私が傘を持っていなかったことがある。夕方まで教室で宿題をしていたがとうとう雨はやま
ず、鞆を頭に乗せて走らなければならなくなったのだ。

駆け足で水溜りに足をつけた瞬間、私の影はびくっと動いた。曇
り空の下で影はかなり薄くなっていて、跳ね起きたドルシェもなん
だか薄く見えた。

「ぎゃっ!？」

飛び上がった弾みに水しぶきを上げたドルシェは、自分が雨の下に
いることに恐怖すら覚えたようだった。

「ごめんねドルシェ。ちよっとだけ我慢して！」

鞆と腕がびしょ濡れになった私を見て、ドルシエは事態を察したらしい。一瞬だけ真面目な顔をして、私の背中にしがみついた。

学校から家まではかなり近い。状況は悪いが、走れば十分とかわらずに帰り着ける。けれどその間、ドルシエは背中にしがみついて、ずっと震え続けていた。

帰ってからドルシエをタオルに包んで、部屋で一緒に温まった。

ドルシエは普段何も食べないけれど、私が飲んでいるホットミルクの甘たるい湯気を好奇心いっぱいに見ていた。

それでもドルシエは、私とタオルが作る影からヒゲ一本はみ出ることもなかった。

「ドルシエ、今夜はどこに出かけるの？」

それからしばらくたったある夜、ベランダで私はドルシエにこう聞いた。

すっかり晴れて、冬らしい、星の綺麗な日だった。

「それっぽく言うと、影猫の集まり、かな」

「え？ 影猫ってたくさんいるの？」

ドルシエによると、影の中に住んでいる猫というのはそれなりの数がいいるらしい……人の影に住み着いてお喋りをしたがるのは少数派らしいが。

「大抵、影猫は裏道とかに住んでるんだ。ほら、皆、日陰が好きだしさ。で、晴れた夜にはなんとなく集まるんだ」

「そっか……。ねえ、ドルシエ」

「何だ？」

私は、何気ない風を保ったままでこう尋ねた。

「自分は影猫でよかったって、思う？」

ドルシエはベランダの作を越えて一階の屋根まで走ると、白く光る星をじっと見つめた。

「……猫はさ、命が九つあるっていうだろ？」

「あ、うん」

「だからさ、猫は死んでも、九回までは同じ猫として生まれ変われるらしいんだ。これは昔、影猫のじいさんから聞いた話だけど」

「へえ……そうなんだ」

「だけど、さ」

ドルシエは私の方を見ようとしなかった。

「猫は死ぬとき、まだ命が残ってても、もう生まれ変わらないって決めることも出来るんだって。生まれるはずの猫が生まれてこないのさ。そしたら、その猫にくつつくはずだった影も、行き場がなくなってしまう……影猫になるんだ、って」

私が何も言えないでいると、ドルシエは小さく首を振って、空を見ながらこう呟いた。

それはまさに私が考えていたことで、正直、聞きたくもないことだった。

「俺は、どんな猫の影になるはずだったんだろうな。」

……なんでそいつ、もう生まれ変わりがたくなかって、生きたくないって、思っただろうな」

私とドルシェ・後編

その日は、嫌な雨が降っていた。

風こそないものの、重たい雨粒がばらばら落ちてきて、軒という軒から水が滴り落ちている。

放課後だった。

私は最近新しくした青色の傘をなるべく体に密着させて、早足で帰っていた。私の家は学校からそこそ遠くて、皆と一緒に学校を出ても、この辺りまで来ると一人になってしまう。

「……ドルシェ？」

雨の日、私の影はほとんど見えない。そういうとき、ドルシェは大抵いつも私の足の真下から出てこないし、ぴくりとも動かない。けれどその日、ドルシェは急に目を覚ました。

「どうしたの？」

目を覚ましたとはいえ、私の影はないも同然なのだから、いつものように飛び出してきて足首にじゃれつくようなことはない。

「……俺、なんか、すごく恐いんだ」

「え？」

私が立ち止まって聞き返すと、ドルシェは足の下からひどく震えた声で訴えかけた。

「その辺の路地裏から……すごく嫌なにおいがする」

「どうしちゃったのよ」

「恐いんだよ……なんか、感じるんだ」

ともかく、私に出来るのは、ドルシェが不安に潰される前にさっさと家に帰ることだ。すぐに乾いた場所まで行けば、いつも通りドルシェも元気になるはずだ。

ところが、私が歩き出そうとしても、ドルシェが動こうとしない。

そうすると私は影が地面にくっついたようなもので、足がほとんど動けない。

そんなことは、今までに一度もなかった。

「ちょっと……ドルシェ？」

「何かが、あるんだよ。わかんねーか？」

ドルシェは確実に、何かを感じ取ったようだった。

「でも、何かって……」

仕方なく私は口を閉じ、周囲を見回してみた。

雨は一向に収まる気配もなく、ざあざあという音が絶え間なく耳に流れ込んでくる。街は全体的に薄暗い。少し裏道に入ったら、ほとんど真っ暗になってしまいうだろう。そういえばドルシェは路地裏が怖いと言っていた……なんだか、おかしい。ドルシェは暗いところが大好きなのだ。

……目に付く一番近い路地は、向かいに見える。雑居ビルの合間にある、幅が一メートルないような細い道だ。そこに目を向けたとき、

………あ

確かに、何か聞こえた。

とめどない雨音の隙間に、なにかもつと柔らかくて、細くて、本当にかすかな、

………みあ

「……猫！」

その言葉に反応して、ドルシェが体を起こした。

私は、幸いにも車の気配がなかった道を一気に駆け抜け、路地に飛び込んだ。

一步入った電信柱の後ろ側には、ごみの袋や空き瓶が無造作に並んでいた。それから青いゴミバケツが二つ、それからその奥に……段ボール箱が、ひとつ。雨水を吸い、しわがよってあちこち折れ曲がったその箱は……蓋が、それでも閉まっていた。

「開けて……くれるか？」

暗闇を伝って背中に登ってきたドルシエが、息せき切って言う。

私はもとよりそのつもりだった。

よれよれになったボール紙を一枚めくると、

「やっぱり……」

捨て猫だった。

まだ生まれて何週間もたっていないのだろう。白猫らしいが、長い毛はばさばさに汚れていて、辛うじて空いている目も両方とも濁ってしまっている。

私が手を伸ばしても、もう抵抗する力もないらしい。かすかに、

「みう」と鳴いた。

「どうするんだよ？」

ドルシエが聞いた。むしろ私は、そのドルシエの言葉で決断できたようなものだった。

「動物病院まで、走れば五分かからないよ」

抱き上げた猫は思ったよりずっと小さくて、軽くて、それでも確かに暖かった。

肩越しに猫を見て、ドルシエは私に問いかけた。

「で……病院連れて行って、どうするんだ？」

それを、私が考えなかったわけではない。私の両親はどちらかというと寛大だが、猫を飼うことに賛成してくれるかどうかは分からない。無理なら里親を探さなければならいし、それも長引いたら……

けれど、

「どうするにしても、連れて行く以外にどうするの」

「……そうだよな」

ドルシエはそう言って、それから、かすかに鳴いている猫をじっと見て、呟いた。

「お前、もうちょっと頑張って生きてみろよ」

その日の夜、私とドルシエは久しぶりに屋根に上った。

まだ空は随分曇っていたけれど、ぼんやりとした満月が顔を出していた。

「ねえ、ドルシエ」

「なんだ？」

「あの子猫は、あれで……よかったのかな？」

急いで駆け込んだ動物病院では、親切に対応してもらえた。そこそこ混み合っていたが、看護師さんが一人ついてくれて、体を洗って、奥まったところで点滴もしてくれた。

綺麗になった子猫はとてつもなく愛らしくて、点滴が終わる頃には濁った目をきよろきよろさせて私を見ていた。お医者さんが様子を見に来てくれた頃には、そろそろミルクか何か用意しようと思っていたのだ。

……けれど、内臓は思った以上にひどい状態だったらしい。子猫の体力がどんどん失われていくのを、私もドルシエも看護師さんも見ていることしか出来なかった。

「……大丈夫だよ」

ドルシエは私の膝の上に座った。

「あいつ、きつとまた生まれてくるさ。あんなに可愛がってもらって、泣いてもらったんだからさ」

「……うん」

ドルシエはそっと、私の体に擦り寄ってきた。

「どうしたの？　ドルシエ」

ドルシエはガウンに顔を押し付けながら、小さくこう言った。

「……あのさ、俺をくつつけるはずだった猫は、誰にも、助けられずに、死んだのかな？　だから、もう生まれてこないことにしたのかな？」

「その猫は、そうした方が良かったと思う？」

ドルシエはふさふさした頬を思う存分私に擦り付けてから、私を見て小さく首を振った。

私とドルシェ・後編（後書き）

……やっぱり子ニャンコに限る、と思った彦星でした。

窓と僕

窓から黒猫が入ってきたときも、僕は何も言わなかった。

ひよっとしたら、窓には網戸をしていたのではなかったかと考えたり、窓枠から机の方までやって来るのではないかと不安に感じたりしたかもしれない。しかし、それも僕にとってはそれほど重要なことではなかった。だから僕は、それらを考えることを一瞬にとどめて、すぐにまた机に広げた問題用紙に目を落とした。

時計は刻々と動いている。アナログ時計なので、あと何分でこの問題のために与えられた時間が終わるのかも一目で分かる。それが、今の僕の全てであって、それ以外の全てのものは、所詮「それ以外」にすぎないのである。

生き抜くために。

私立中学の受験に失敗したことは、母親にとってまるで予想もしていないことだったらしい。

僕はどちらかというと、母のそれまでの言葉を信じて「受かったら儲けもの」と考えていた。落ちたら、それまでのクラスメイトと一緒に公立中学に行けばいいだけであって、そうすればそれなりに学校を楽しんで、ひよっとしたらテニス部を続けて、そしてまたひよっとしたら生徒会と名を変えた児童会に入って活動できるかもしれない。それも、僕にとっては非常に価値のある物事だった。

母は間違っていた、と思う。私立校に入ってからその後の人生は明るい、なんて考えるのはナンセンスなことで、そこだけに情熱を注ぎ込むのはおかしい。入学したらいいよ勉強漬けになるのは目に見えたことで、それは僕にとって決して楽しいことではないと、僕は考えていた。

けれど、僕も間違っていた。

私立校に入ったら明るい生活を送れるわけではない。ところが、

公立校では明るい生活など決して望めないのだ。

僕の家から自転車で十数分のその公立校は、それなりに活気があって、それなりに進学率がよくて、けれどそれなりに荒れていた。進学率の向上に貢献しているような連中は皆、教室の中で起きていることにまるで無頓着で、それ以外の連中もまるで仕組まれたようにレベル別に集まって、閉鎖的な社会を形成していた。それは何度か覗いたテニス部でも同様で、頭のいい面々はそれなりの能力をそれなりに消化することに勤めていて、そうでない面々はその日の遊びに熱中しては常に騒ぎ立てていた。

当初、僕の周辺には頭のいい連中が集まってきた。それなりに会話をして、雑誌の貸し借りをして、けれど塾だ何だといって放課後にはあつという間に散ってしまう不思議なグループの中で、僕はまるで楽しいことを見つけ出すことが出来なかった。

かといって別のグループに機会を見つけて首を突っ込んでみると、とたんに先生への悪口やクラスメイトのよからぬ噂話に淘汰され、学校全てが恐ろしくなるような目にあった。おまけにその一幕が別のグループに知れて、僕には三年間消えそうにない「変な奴」の名が刻まれることになった。

そんな中で僕がそれなりに過ごすための、唯一の簡単な方法は、トップクラスの成績を維持することだった。

そうする事で、僕は隙を見せずに生活することが出来て、目立ちたくないが無視されもしない「クラスの一員」としての小さな空間を確保することが出来た。

時計の長針が終了時刻とまだ60度以上の角を成している状態で、ぼくはその問題を片付けた。もともと小問集合系の問題だったので、やり方さえ確認できればあとは素早く終わったのだ。

顔を上げると、黒猫はまだ窓枠に座っていた。僕はそのとき初めてまともに驚いて、椅子から立ち上がった。

「お前、どこから来たんだ？」

手を差し伸べてみるが、別段反応も無い。飼い猫なのだろうか……それなら、人の家に堂々と入り込む度胸があってもおかしくない。ちらりと見てみるが、やはり網戸を閉め忘れていたようだ。飼い猫にしては痩せている気がするが、こういう黒猫ならありえなくはない。毛並みもいいし、目も澄んでいる。ちょうど辺りは夕暮れで薄暗くなってくる頃で、窓枠の影が壁を這うように長く伸びていて、猫もその中にいた。それは、そこそ絵になる光景で、けれどあまり嬉しいものではなかった。

「……でもお前、首輪してないんだな」

その僕の言葉は単に今気付いた事柄に関する独り言だったのだが、まるで空気にも無視されたかのように小さく聞こえた。しかし猫はそれに小さな顔を上げて、そして、僕にこう言った。

「首輪って猫によって好き嫌いが分かれるらしいぜ？」

あまりのことに、僕は息をつめて猫をじっと見ていた。猫の方は平気なように前足を舐めて、再び僕の方を見る。

「そんな顔するなよ。あんたが気に入ったから話しかけたのにさ」
そんな事を言われても、僕はどう反応していいのかわからない。猫の方を見たり、周囲に視線を送ったりしていたが……不意に、光景の違和感に気がついた。

窓枠の影は長く伸びている。ところが、猫の影らしきものが存在しないのである。

とりあえず、この猫が何か不思議なものであることは分かった。しかし、一体どうすればいいんだろう。

僕は深呼吸してから、問いかけた。

「何しにきたの？」

猫はゆっくり伸びをしてから、眠そうな目で言った。

「いや、最初はここの影が気に入っただけなんだけど……あんと話したくなって」

「えっ？」

「あんたの影、いい感じに濃いからさ」

僕はまた反応に困って、ゆっくり首をかしげた。猫の方はすっかり部屋に慣れたように、ぴよんと跳んで机の上までやって来てしまう。

「“影猫”にとって、人の濃い影っていうのはすごく嬉しいんだ。住み場所としては最高だから」

「どういう意味？」

「こういう事さ」

言うと、黒猫はまた跳んで、僕の胸を駆け上ると背中側に回りこんだ。慌てて僕は体をよじるが、猫の姿は見当たらない。はっと振り返って部屋の扉を見たが、いつも通りきっちり閉まっている。

猫は、跡形もなく消えてしまった。

僕はちよつと気が抜けてしまって、しばらくそこに立っていた。

一体、僕は今どうしていたのだろう。猫と会話して、その猫は僕の背中からあつという間に消えてしまう……こんなリアルな猫の感触がなければ、寝ぼけていたと結論付けるに違いない。

ところが。

立っていられないほどの強烈な倦怠感に襲われたのは、その直後だった。

肩にいきなり重しが乗ったように、まるで力が入らない。大気圧に負けるようにして、僕はそのままベッドに転がった。

仰向けになると、自然と目が閉じてくる。視界が黒に包まれて、夕闇が少しずつ暗くしていく部屋の中で眠りに落ちかける。

それは、決して不快なことではなかった。

「あんたの影、ほんとに濃いな」

そんな僕が再び聞いたのは、あの黒猫の声だった。

「俺が加わっただけで立てなくなるなんて……もう限界、だぞ。いい加減、よく寝て楽しいことしろよ。こっちが罪悪感覚えてりゃ世話無いぜ、全く」

次の瞬間、倦怠感はすっと軽くなった。

目を開けた僕が仰向けのままで見たのは、黒い猫がこちらを気にしながら窓を出て、影の無い体で何処かへ行ってしまう様子だった。

机のスタンドが点けっぱなしだったが、そんなことはどうでもよかった。

僕は再び目を閉じた。視界が黒く塗りつぶされる。

僕の背中に出来ているはずの、どこまでも真っ黒な僕の影が、ゆっくりと僕の全身を包み込んでいくような錯覚に襲われた。

真っ黒い布団。漆黒のゆりかご。そしてやはりそれは、決して不快な感覚ではなかった。

僕は、ここから起き上がることが出来るのだろうか。僕はそんな事を考えた。

あと三十分ほどは、誰も僕の事を気にしない。しかしそれから後に、僕がずっと部屋にいたなら、おそらく母は様子を見に来るに違いない。ひよっとしたら、夕飯の支度が出来たといいながら。

それも、おそらく部屋の前で声をかけるだけになるだろう。僕の部屋には鍵がついている。無理に開けるようなことを母はしない。

もし、それでも僕が起き上がらなかったら……一体、母はどうするだろう。病気を疑ってドアをこじ開けるだろうか。父の帰りを待つだろうか。

もし、誰がなんと言おうと僕が起き上がらず、反応もせず、ずっと眠ったままだったら……一体、どうなるのだろうか。

さて、それが楽しいことならばそうするのも悪くないだろう。
とりあえず様子を見ることにして、僕はうつ伏せになると本格的
に眠り始めた。

俺様のラッカス・前編

夜は大好きだ。

世界中が、俺様と同じ漆黒に染まる。

「そう思わないか？ ラッカス」

俺様がそう言うのと、ラッカスは細い尻尾を垂らして呟く。

「あたし、あんたと同じ色で、本当に不名誉だわ」

俺様がこの街にやって来てから、そろそろ一週間になる。いつもならそろそろ出発する時期なのだが、まだそのタイミングを掴みかねている。

「どうしような……」

呟いてみるが、声は夜空に消えていく。ラッカスは俺様の寝ている足元で、そ知らぬ顔で前足を舐めている。綺麗好きなやつだ。

俺様が寝ている場所、というのは、古い教会の屋根の上だ。もう人が住んでいるのかも分からないくらいボロボロの建物で、構造も古臭い。俺様が乗っているこの屋根は、十字架が取り付けられている一番高い場所なのだが、傾斜が急で寝づらいことこの上ない。足を雨樋に引っ掛ければ、頭は十字架の真下まで来る。で、ラッカスは雨樋伝いに俺様の周囲をうろうろしている、というわけだ。

「あーもう、寝苦しい」

俺様の次の独り言には、ラッカスの容赦ない切り返しがついてきた。

「じゃ、ここじゃなくて神社の屋根で寝れば？ 広かったわよ」

「バーカ、広けりゃいいってもんじゃねーだろ」

「でも、そこは寝苦しいんでしょ？」

「気分がよけりゃ、寝苦しくてもいいんだよ」

俺様はどうとう体を起こして、夜空に浮かぶ月を眺める。俺様の髪と同じ銀色をした満月だ。俺様の気分はかなりよくなる。

「……ラッカス、この街は好きか？」

「別に？　じゃ、あんたはどうなのよ？」

「さあな」

俺様は腕を伸ばして、ラッカスを抱き上げた。

「にゃっ」

ラッカスは猫らしい抵抗をしてみせるが、俺様は気にも留めてやらない。ツヤツヤした黒い毛をゆったり撫でてから、

「一緒に寝ようぜ、ラッカス」

長衣を広げてそう言うと、ラッカスは不満たらたらにこう言うてる。

「嫌よ、そんな寝心地悪そうなの……裾がボロボロじゃない」

「そこがいいんだよ」

確かに、ギザギザになってしまった長衣は大して寝心地もよくないが、どうせ眠りなんて俺様にとつてそれほど重要なことではない。ただ……特に他に今出来ることもないから、眠るだけだ。

「呆れた。宵の口から寝るなんて……」

「うるさいな、寝ないんならどっか、俺様の邪魔にならないところに行けよ」

「言われなくてもそうするわよ」

ラッカスはさも嫌そうな声でそう言うと、こちらを振り返りもせずになささと歩いていく。俺様はそれを少し眺めてから、さささと長衣を頭までかぶる。

「強がらずにはつきり言ったらどうなの？　どうせ、次の町にいく力もないんですよ」

ラッカスの悪態が聞こえてきた。

俺様は何か言い返そうとしたが、言葉を思いつく前に熟睡していた。

俺様は目を開けた。目が覚めるのと同様だったが、意識ははっきりしていた。長衣から顔を出すと、美しすぎる夜が目の前に広がっ

ている。一瞬、眠りに落ちてから丸一日ほどたっているのかと思っ
たが、すぐに思い直した。満月は欠けた様子もなく、しかもまだ天
頂には達していない。どうやら、眠っていたのはほんの数時間のよ
うだ。

ラッカスはまだ出掛けているのか、そこにはいなかった。まあそ
れも仕方がない。

しかし……いい夜だ。ため息が出そうになる。

俺様は気取って跳ね起きると、十字架の上に立った。姿勢には自
信があるので、このポーズは結構サマになる。ここ数日ほとんど一
日中寝転がっていたので、疲れた体にもいくらかの元気が注ぎ込ま
れている。

風ではためく長衣はまずまずかっこいいが、俺様は一旦それを脱
いだ。この季節なので、長衣の内側に着ている黒のカッターシャツ
は半袖仕様だ。シャツくらい白にすればどうだとラッカスに言われ
たこともあるが、こればかりは譲れない。混じりけなしの漆黒が、
俺様の銀髪によく似合うのだ。ついでに、赤のリボンタイも。

まったく、いい夜だ。

俺様は月に向かってニヤリと笑ってみせてから、右手に持った長
衣を空中に放り投げた。黒い長衣が広がって舞い上がるのを長めつ
つ、俺様自身も夜空に躍り出る。十字架からダイブして、大きく前
方へ。

銀髪が後ろへ流れる。体を縮めてから一気に伸ばすと、俺様の背
中から一對の羽が伸びる。蝙蝠に似た黒い羽。俺様のトレードマー
クというわけだ。

いつもながら、気持ちがいい。

ゆっくり滑空してから上昇に転じる、その間一秒未満。宙に浮か
んだままの長衣を手にとると、俺様はそれを体の周囲に広げた。裾
のギザギザになった薄っぺらい長衣だが、このときだけはいつもの
二倍ほどの大きさになって、素早く回転する。次の瞬間には、長衣
は夜空と一体化して、俺様の姿を周囲から隠してくれるのだ。

ああ。……いい夜、だ。

最近は夜明けが早い。それほど時間に余裕はないようだ。

俺様は夜空に溶け込んだ体を回転させると、大通りに向かって羽を動かした。上空から見る街灯の列は妙に綺麗で、人工的で、俺様の好みではなかった。

吸血鬼、と呼ばれるのは嫌いだ。

それは俺様の事を上手く言い表しているとはいえないし、呼ばれて気持ちいい呼び名でもない。少なくとも俺様は自分が「鬼」だとは思っていない……いや、そういえばラッカスと初めて会ったときに、無視しようとしたら思いっきり「鬼」だの「悪魔」だの呼ばれたな。まあ、関係ない話だ。それに、結局俺様はラッカスを拾ってやったわけだし。

俺様は大通りに沿って飛びながら、目をつけていた公園に飛び込んだ。

吸血鬼、と呼ばれるのは嫌いだが、吸血鬼、と呼ばれる者であることは大切にしようと思っている。

俺様の父親は由緒正しいトランシルヴァニア育ちの立派な吸血鬼（父さんは綺麗な発音でヴァンパイア、と呼んだ）だ。二度の大戦を地下室で乗り越えた父さんは退屈で死にそうだったそうで、ユーラシアをゆっくり横断してとうとう日本まで来てしまった。その後、ごく普通の日本人だった母さんと「大恋愛」をして俺様の誕生と相成った、らしい。だから俺様は国籍もハーフだし、種族としての血も半分しか持っていない事になる。もっともそれによる弊害は、あまり速く飛べないことくらいだから、別に気にはしていない。

こんな刺激の少ない旅暮らしの身でも、俺様はトランシルヴァニアの血を受け継ぐれっきとしたヴァンパイア（父さんの真似をしてみる）なのだ。

と言いついたところで、俺様は今日の獲物を見つけた。

人気のない公園でぼんやりブランコに座っている、金髪の女の子だ。見た目の年齢は俺と大差ないだろう。俺様は音もなく彼女の目の前に着地すると、夜色の長衣を払いのけた。

相手からすれば人間が目の前にいきなり現れたわけだから、驚かれても仕方がない……悲鳴を上げられては困るので、その素振りを見せたら口を塞いでしまおうと身構えてもいた。ところが彼女はとろんとした目をこちらに向けたただけだった。

ドラッグだろうか。だとしたら面白くない……あれは血をまですくする。

「……誰？」

女の子はやたら幼く見える口調で問いかけた。俺様の返事を遮って話し続けやがる。

「誰でもいいかなあ……でも素敵な色の髪ね。どうやってブリーチしたの？ 黒服、似合うじゃない」

「髪は父さん譲りだよ」

俺様は事実を口にした。

「ふうん……あれ、それ羽？ かつこいー」

奇抜な格好はまだ流行しているのだろうか。もつとも、こんな大きい羽をつけた奴というのはライブハウスのステージでしか見たことがない。

あ、笑わないでほしい。俺様だってたまには……羽を伸ばすために、羽を畳んで若々しい遊びをしたりするのだ。

駄洒落はさておき、俺様は彼女の肩に手を乗せた。仕草は紳士に、活動は大胆に。父親に仕込まれた、俺様のやり方だ。

さすがに、相手はちよつと驚いたらしい。

「何、するのよお……？」

しかし、やはり覇気に欠ける。

「好きだろ？ 刺激的な事」

俺様は目を閉じて軽く息をつく、脇目も振らずに彼女の首筋に

むしゃぶりついた。

「テツメー、俺の女に何しやがる！」

濁った怒声に顔を上げると、男が三人俺の方へ駆け寄ってくるころだった。中央にいる男がどうやら、今は眠っているこの女の子の恋人らしい。金色の髪はあちこち黒い筋だらけで、お世辞にもあまりかっこいいとは思えない。

女の子をゆっくり地面に座らせていると、男はバタフライナイフを片手に襲い掛かってきた。俺様は素早く飛びのいて、空中にぶら下げておいた長衣を巻きつけた。これで、俺の姿は見えなくなっただろう。

ところが、安心するのは早かった。

突然の事態に混乱した男は、見境なくナイフを振り回し始めたのだ。錯乱しているのか……ドラッグでもやってるのか。いや、何でも薬のせいにするのはよくないだろう。さっきの子も意外と美味かったし……

が。更に運の悪いことに、次の瞬間、男の手からナイフがすっぽ抜けてしまった。それだけなら武器が消えたと喜ぶ所だが、あろう事か俺様の方へ一直線に飛んでくる。慌ててかわして上昇したが、ナイフが長衣に引っ掛かってしまった。ビリビリッと嫌な音がして、長衣が破れて……俺様の周囲から剥がれ落ちた。

俺様のラッカス・後編

「そこかあっ!!」

やばい。あの男、絶対にラリッてやがる。

俺様は長衣の切れ端を腕に巻きつけて、慌てて上昇した。しかし、一度見つけたものはなかなか見逃さないのが人間という生き物である。俺様がいくら上昇しても見失ってくれそうにないし、残念ながら俺様は成人男性が走るくらいの速さでしか飛べないのだ。

「待てコラァ!」

「バケモンが!」

「汚ねえ事しやがって!!」

その言葉を聞いて、俺様は思わず呟いた。

「そう思うなら、一人くらい彼女の傍にいてやれよ……」

聞こえたところで、奴らがどうリアクションするか知らないが。

俺様はゆっくり旋回して、物陰に隠れたりしながら移動を試みたが、少し動いては発見され、少し動いてはまた見つかるの繰り返しだった。そして奴らは、俺様が飛ぶより少々早く走っては、俺様に乱暴な手つきでナイフや小石を投げてくるのだ。

……ひょっとして、史上最大の危機なのだろうか。

また隠れたり見つかったりしながら、俺は教会の上まで戻ってきた。

ちなみに相手は全員まだついてきていて、教会の下から「降りてきやがれ!」とか「教会に乗るんじゃない、ドラキュラの癖して!」とか叫んでいる。

突っ込みどころがありすぎる。彼らが日頃からキリスト教を信仰しているとは思えないし、ちゃんと手入れされている純銀の十字架でもない俺様にダメージは与えられない。ちなみにドラキュラというのは、有名な話だが小説上の人名で……もういいや。

どうせここにいるのはバレバレなので、居心地のいい十字架の上に腰掛けながら、俺様は策を巡らせた。

真っ二つになった長衣は……俺様の両腕に巻きついていてるが、これを使おうとしても数分しかもたないだろう。一番いいのは、その数分でなるべく遠くまで行くことだ。風も使って……うまくいけば、町を出られるだろう。なるべく上空を飛んで……

「あ、……駄目だ」

旅をする吸血鬼には、鉢合わせを防いだり噂がたたないようにしたりするための絶対的なルールがある。その中でも基本なのが、「一度『食事』をした後で、その場所から二キロ以上離れたら、もうそこには戻ってはいけない」というものだ。

つまり……まだ公園から二キロ以上離れるわけにはいかない。

俺様はトランシルヴァニアの血を受け継ぐ立派なヴァンパイアだ。ラリッた若造相手に怯えてなどいられない。

十字架から飛び立つと、下から聞こえる男達の怒鳴り声が大きくなった。ちょうど教会を三方向から取り囲んでいる。俺様はなるべく三人をばらばらにしておくために、そのうち体格がよくない二人を選ぶとその間に降下した。そのまま全速力で低空飛行しながら、俺様は周囲を気にせず大声で叫んだ。

「ラッカス!!」

初めて出会ったとき、ラッカスはスマートな体を綺麗に揺らして、俺様にこう囁いた。

「あんたの影は、底無しに暗いのね」

それは影猫としては、それなりに褒め言葉になるらしかった。

影猫は、闇さえあれば生きていける点、吸血鬼よりも燃費がいい動物だ。とはいえ、とりわけ「濃い」影を持っているのは得てして人である。そのため、影猫は時折、こっそりと人の影に棲みつくものらしい。……そしてラッカスは、どういう理由なのかは知らない

が、極端に濃い闇がないと生きていけない影猫なのだった。人間なら耐え切れないほどの濃い影が、住処として必要なのである。

つまり。

俺様がラッカスを捨てたら、ラッカスは確実に生きていけないのだ。

「何処にいるんだ、ラッカス！」

ラッカスの好きな細い路地は、羽を広げた俺様には少々狭い。結果、速度が落ちる。小石の的になるくらいなら体力的には耐えられるが、精神的には結構きつい。トランシルヴァニアの血が泣く、という感じだ。

それでも縫うように飛ぶと、とりあえず敵の目は逸らすことができる。俺様は自慢の聴力を駆使して、相手の足音を聞き取ると避けながら飛んだ。もちろん、ラッカスの軽い足音も聞き逃さないように注意している。

ラッカスはなかなか見つからない。

「おい、ラッカス！ 速く出て来いよ！ ここを出たら、暖かくて柔らかい本物のマント新調してやるから！」

少し太い道に出たので、少し速度を上げた。しかし挟み撃ちになりそうだったので、上昇して道を一本移る。また速度を落として、ついでに呼びかけてみる。そういう事を何度か繰り返すうちに、俺は公園周辺の半径二キロ地帯をほぼ全て回ってしまった。

運が悪すぎる。ラッカスは久しぶりの遠出をしてしまったらしい。ここからどうするかはかなりの大問題だ。どちらかにずれながら進んでいくわけだが、一度半径二キロの範囲から出るともう戻れないわけだから、反対側に移動しようとする、かなりの遠回りをして行かなければならない。

本当に、笑わないでほしい。俺様たちがこういう細かいルールを死守しているおかげで、一般の方々は吸血鬼のことなんて何も知らずに過ごせているのである。

とはいえ、時間がない。俺様は少しだけ考えて、再び教会の方へ移動することに決めた。「何かあったら」、とりあえず寝床に戻る。そういう事にしていた。寝床が神社ではなくて教会なのは、吸血鬼としての気分の問題ももちろんあるが、外から見てよく目立つのも大きな理由なのである。

しかし、教会の方向から二キロ範囲を越える瞬間、俺様は少しだけ躊躇した。

奴らはそれを見逃さなかった。俺様が動きを止めたのを見て、一気に近付いてくる。そして先頭を走るその男の手には、ナイフが握られていた……重くて投げられなかったのだろう。そのナイフは、普通の店ではお目にかかれなような大きさだった。

あいにくこの道はひどく細いので、俺様の得意技である急旋回を使うのには無理がある。それでは上昇で避けるか……しかし、一歩進んだらもうバックできない今の状況で、下手な動きをすると一気に不利になる。

あのナイフが刺さったらどうなるか、を考えてみる。心臓を貫通でもない限り、致命的な攻撃にはならないだろうが、当たり所によつてはここからの動作に支障が出てくるのは間違いない。動脈が切れると、かなりまずいだろう。吸血鬼は貧血に弱いわけで……しかも俺様は、種族としての血も半分なら年齢だってまだ二桁の半人前なのだ。

「覚悟しやがれっ！」

男はナイフを振り上げた。俺様は仕方なく身構える。
ところが、次の瞬間。

「なっ、何すんだよこの野郎!!」

男が悲鳴にも似た声をあげた。見ると、ナイフを持った手首に何かがくっついている。真っ黒くて、少々丸っこい……

「ラッカス!!」

ラッカスは俺の声を聞かなかったことにしたようだ。手首から軽やかに跳び上がると、そのまま男の顔に猛烈な引つ掻きを食らわせる。あー、あれすごく痛いんだよな。

「ぎゃああっ!」

男が堪らず悲鳴を上げる。背後にいた二人が慌てて駆け寄った。

ラッカスはその瞬間を見逃さなかった。街灯が作った三人の影が、接近することで重なったのを確認すると、その中に飛び込んだのである。ラッカスの姿は急に見えなくなる。三人はしばらく、混乱して周囲を見回していたが、不意に揃ってぼったりと倒れてしまった。ラッカス自身も、かなり濃い闇を持つ影猫だ。普通の人間では、三人がかりでも耐えられないのである。

ラッカスは失神した三人の下から再び軽やかに跳び出して来た。俺は駆け寄ってラッカスを抱えると、そのまま一気に上昇した。

長衣はすっかり破れてしまつて、俺の周囲をふらふらと回転していた。これでは数分どころか一分もつかも怪しいが、失神した追っ手を撒くには十分だろう。

俺様は飛び続けながら、腕の中のラッカスを撫でた。

「ありがとうな、ラッカス。助けてくれて」

ラッカスは長いため息をついた。

「あーあ。あたしはあんたの使い魔じゃないんだからね? でも……」

言いかけて、ラッカスはまた息をつく。ところが今度は、どうやら喉を鳴らしているようだった。ゴロゴロいう音が心地よい。

「……でも、ありがとうね。探してくれて」

満月はそろそろ沈んでしまいそうだ。朝日が出る前に、新しい寝床を見つけないと……長衣をかぶっていれば屋根の上でも平気なの

だが、しばらくはちゃんと日陰を探さなければならない。
日光は苦手だ。

「廃屋とかねーかな……」

「お寺の森は？」

「ふざけんなよっ！」

とりあえず俺様は、もう少し飛び続けることにした。
まったく、いい夜は長続きしない。

俺様のラッカス・後編（後書き）

連休中に書きあがる予定が……

君を待ってる

―影猫？

「そうよ。産まれなかった猫の影だけが、一人歩きをしているの」

―どうして猫は産まれなかったの？

「七つの命を使う前に、生きることをやめてしまったの」

＊ ＊ ＊

君はてきぱきと歩み寄って、その老女と少女の間に割って入る。

「やめてください、シスター・アンジー。リリイが恐がってるじゃないですか」

そして少女を奪うようにして手を引っ張ると、しゃがんでお説教を始める。

「いいわねリリイ、今は皆で遊ぶ時間なの。一人だけでこんな寒いところにいちゃ駄目じゃない。さあ、行くわよ」

君は立ち上がると、再び老女と向き合った。

「シスター・アンジー。貴方のことは尊敬していますわ。だけど……そろそろ引退なさったほうがよろしいんじゃないですか？」

「さあ、とっくに引退したようなものよ」

君は少女と一緒に、鬱蒼とした教会の林を歩いていく。今日は太陽も出ていなくて、湿り気のある風は人のいる空間だけを周りから切り離していくようだ。

「ねえ……あの、シスター？」

「どうしたの、リリイ」

「影猫って、本当にいるの？」

「そんなもの、いないわよ。怖い事なんかないわ」

「ううん、もし影の中に住むんなら……ここで飼えるかな、って」

君はあからさまなため息をつく。

「いいわね、リリィ。影猫も妖精も、本当はいないのよ。神様はそんなものをお造りになっていないわ。そうでしょう？ 分かったら返事して」

「……はい、シスター」

少女が頷くので、君は満足そうに笑ってみせる。

「いい子ね。さ、戻ってみんなと遊びましょう。今日はお絵かきをしているわ」

木々がさわさわと揺れている。君が揺らす黒いベールは、本当に綺麗だ。

少女は下を向いて、足を止めがちになる。

「お絵かきなんて、したくない……メルダが私の絵にいたずらするの」

「あなたの絵に隙間がたくさんあるからよ」

「だって、あれは魔法使いのお庭なんだもん……お姫様を描かれるのは嫌」

「いい加減になさい、リリィ」

君はどうして、薔薇園が嫌いなんだろう。

君のところの子どもが入り込みでもしない限り、君は決してそこに近寄ろうとしない。

皆、安らぐと言ってお茶会の場所に使っているのに、君は参加しようともしない。

君を待っているのに。

*

*

*

「ティム！ ドロシー！ 喧嘩はやめなさい！」

君は今日も大声で、取っ組み合った子ども達を引き剥がす。

「今日は皆で感謝祭の準備をするんじゃないかったの？ どうして花束も作れないの！」

その怒声に、ポニーテールの少女は火がついたように泣き出した。それを見た子ども達が、一斉に君へ説明を始める。

「あのね、ティムが崖の上でクロッカスを探してきたから、ドロシーが一本頂戴って言ったのよ」

「違うよ、ドロシーはいきなり取り上げたんだよ。それでティムが怒って……」

「それはティムが意地悪して、あげないって言ったからだよ」

「ドロシー達は皆で大きい花束が作りたかったのよ」

「でも、最初はティムのこと仲間はズレにしてたんだよ」

「ティムだってカレンの桜草を一本もらったのに……」

「もうおやめなさい！」

君はまた大声で、その場を鎮める。

「分かりました。ティム、クロッカスは何本見つけたの？」

「……三本だよ」

「どうして一本ドロシーにあげなかったの？」

「ドロシーが三本とも欲しいって言ったんだ」

「そうなの、ドロシー？」

「だって、……メルダとデビーも、欲しい、って、言ったから……」
君はまたため息をつく。

「仕方ないわね。いい事、ドロシー？ 今度から、頼み事をするときには無茶を言わないの。ティムだってクロッカスを使いたいことくらい、分かるでしょう？」

「でも、でもメルダが……」

「人のせいにしないの！ 分かった？」

「……はい、シスター」

一仕事を終えた君は、満足げに周囲を見回す。ところが、問題はまだ終わっていない。

「あの、シスター」

「どうしたの、カレン？」

「それが……ティムが棒を振り回したから、リリィの花束は壊れちゃったの」

目を向けると、ひととき小さな少女は震えながら、君の方へばらばらになったピンクの花を手渡そうとする。君はしかし、少女の目を見ないままと言う。

「本当、とろいんだから」

君はそれほど、世界全てに嫌気が差しているの？

君がそう思うなら、早く来てよ。

君を待っているから。

＊

＊

＊

「シスター・アンジーの薔薇園には入るなって、何度言ったら分かるの！」

君が怒鳴ると、小さな少女は小さな声で言う。

「でも、あたし……」

「口答えるのはやめて！」

乾いた音が響く。

少女がおびえた目をしているのが、君には気に入らない。

「すぐに戻りなさい！」

「でも……」

「でもないの！」

「……でも、鞆を落としてきちゃったの」

そしてまた、大きなため息。

「……仕方ないわね。私が取ってくるから、もうお戻り」

薔薇園は林の真ん中にぽつりとあって、蔓薔薇の垣根に覆われている。湿った薄緑の木々の中で、赤い花だけが妙に毒々しい。君は錆びた門を開けて、狭い空間に足を踏み入れる。

「あら、いらっしやい」

「リリーの鞆を見ていませんか？」

「さあね……持っていたのは知ってるけど、どうしちゃったのかしら？」

老女の緩慢な笑みも、君を苛立たせるらしい。

「あの子なら、鞆がなくなったことをいつまでも気にしたりしないわ。見つかるときには出てくるものだから……それより、貴方も疲れてるみたいじゃない。座っていく？」

「冗談じゃないわ」

君は叩きつける様にそう言う。それでも老女が怒らないのを、君は喜ばない。

「貴方は私の最後の生徒だったわね。薔薇園の手入れもよくやってくれたじゃない」

「忘れました、そんなこと」

「……そう。」

ああ、思い出したわ。リリー、ここを出るときには鞆を持っていたのよ。きつと、転んだか何かして林に落としたんじゃないかしら？」

「そうですか。それは、どうも」

君は林の中を進んでくる。

時々茂みをかき分けては、赤い鞆を捜して動き回っている。

赤い鞆。綺麗な鞆。

君はそれで遊んだことがある。

「きゃっ！！」

足を滑らせたのだろうか。

君は道から大きく外れて、鬱蒼とした茂みの中に落ちて来る。張り巡らされた木々の枝は太陽を覆い隠し、地面の湿気を保ち、君に暗い影を落とす。

「どうなってるのよ、もう……」

君は足を押さえて、そしてこちらを向いた。

はじめまして。

「黒猫……？」

やっと君に会えたね。

ずっと、ここで待っていたんだ。

「う……っ、嘘でしょ！？ 何、あれ！？」

君は元々青白い顔をもっと薄い色にして、じっとこちらを見ながら震える声で言う。

ずっと、遊び相手が欲しかったんだよ。

覚えている顔は、君だけだったんだ。

だから、君だけを待っていたんだよ。

「そ……そんな……私を、恨んでる、って言うの？」

そんなつもりは、なかったんだけどな。

だって、君のおかげで影猫になれたんだから。自由に動けるんだから、普通に猫の影になるよりずっと面白いよ。

君とも、二人っきりで遊べるし。

「許してよ……そんなつもりじゃ、なかったのよ……」

知ってるよ。

そのときは影にもなっていなかったけど、君がそんなつもりじゃなかったのは知ってる。

ただ君は、薔薇園に入ってきた黒猫に、花をあげようとしたんだよね。

でも、猫があんまり嫌がるから、ちょっと怒っただけなんだ。

鞠を投げつけたのだって、それで猫の気を惹けないかと思ったただけで。

それで猫が頸を折って死ぬなんて、少しだって想像しなかったんだ。

そして君は猫の死骸をここに埋めて、薔薇園に行かなくなってしまった。

だから、それからずっと、ここで待っていたんだ。

影の外には出られなくて、君の顔しか、覚えていなくて。

「やめて……」

おびえている君の傍に、そっと降りる。黒猫の姿も好きだったけれど、君と一緒にいられるなら喜んで捨ててしまえる。

影猫の姿は君の黒い影に混ざり合って、そしてすっかり失われた。

「いつ、いや……動けない……私の影、こんなに黒く……」

君はもう動けない。

影猫の入った濃い影は、君にとっては重すぎるのだ。

「いやあああっ!!」

それほど濃くない影を持つ影猫もいるらしいのに、どうしてこん

なに濃くなっただんたろうね。

それとも、やっぱり死んだ猫の方は、君を恨んでいるのだろうか。
どうだろうね……あ、別に答えてくれなくてもいいよ。

ずっと、一緒だから。

あたしのやり方・前編

一般的な言い方は好きじゃないのだけれど。

あたしは人より、見えない方がいいものを見る機会がやたらと多い。

事の起こりは小学四年生の夏で、肝試し中に道に迷っていたら白い服のおじいさんが道を教えてくれたのだ。当時それをあっさり人にしゃべったら、肝試しを仕切る地区会の中学生が悲鳴を上げて大騒ぎになった。以来、夜中に初対面の人と会話をしても絶対に口外しないようにしている。

あたしが中学生になったときには、いわゆる「こっくりさん」が周期的なブームを迎えていて、教室のあちこちで10円玉が紙の上で滑らされていた。その間、私はずっと図書室に逃げていた。狐が浮いているくらいなら我慢できるが、間違って呼び出された若い色白のお姉さん（しかも髪の毛を振り乱したままの）なんか見ながら平然としていられる訳がない。

そういう経験は少なからずあたしに度胸をつけたが、あたしに親しみを示してくれる「ひと」はだんだん減っていった。それは、ほんの少し寂しい事だった。

あたしが勤める会社はいわゆる電子系のベンチャー企業で、オフィスもとても新しい。しかし、オフィスがある通りは少しうらぶれた感じで、夕暮れ時に通るのは何もなくなるともなく嫌な感じがする。

それが起こったのも、空が黄色から赤へと変わり始める黄昏時だった。

あたしは残業に備えた買出しを終えて、足早にオフィスへと戻る

ところだった。太陽はあたしのちょうど真後ろにあって、町並みを丁寧に見ていた。しかしあたしの前には長い長い影が伸びていて、あたしはなんとなく不安な気持ちになった。

この感覚がいけない。結局、見ないほうがいいものを見て実際的な被害をこうむる事などほとんどないのだが、被害をこうむる予感というのがこの感覚なのである。

……と、明治の文学家が喜びそうな表現を試みたが、本当の話だ。六年生の時にはこの感覚の後、路上に立っている男性を見つけて、ふと気がつくと自分がその位置に来てしまっていて……危うく交通事故になるところだった。高校の入学式では校長の横に怖い顔のおばあさんがいて、脳貧血で保健室送りになった。

そんなわけで、あたしは久しぶりの感覚に緊張して、身震いしながら足を速めた。

と。

すれ違ったサラリーマンの影の中に、黒猫がいた。

猫は別に珍しくない。このうらぶれた通りには猫が似合うし、黒猫にもときたま出くわす。

しかし……そのサラリーマンはかなり足早に歩いているにもかかわらず、黒猫はまるで体を動かしていない。にもかかわらず、猫は彼の影の上にとっかりと乗ったまま、取り残されずについていているのである。

あたしは思わず足を止め、口を半開きにしてそれをじっと見ている。

黒猫はそんなあたしに気付いたのか、ふいと首を曲げてこちらを向いた。影に乗って、だんだんあたしから遠くなっていきながら、黒猫はあたしに向かって、はっきりとこう言った。

「深入りしたくなければ、見なかったことにしてね」

そして黒猫はそのまま、影の中に溶け込むように消えてしまった。

見なかったことにするのは簡単だ。

あたしには仕事があるし、一人暮らしの生活も維持しないといけないし、残りは趣味だの遊びだのに費やすことも出来る。そういう生活が続けるのは難しいことではない。

しかし。

あたしは、この出来事がそれなりに大きい意味を持つのだと感じていた。妙な感覚の事もあるし、動物の姿をしたもので口をきくものに会ったのは初めてだった。

何があたしを駆り立てたのかは分からない。深入りなんて、本当はしたくない。けれど、あたしはどうにかしてあの猫に再び会いたいと思った。

町には一本、家の裏側を辿るようにして細い道がある。

あたしは相変わらずの腐臭を気にしながら奥に入って、いつものダンボール（私がこっそり運び込んだのだ）に腰掛けた。放っておいても、雨さえなければしばらくは壊れない。

既に足元には子猫が数匹集まってきている。あたしは持ってきたサーモンフレークのビンを開けると、少しずつ取り出して子猫たちに振舞った。最初は度々引っ掻かれたけれど、そのうち慣れられたのか、猫の匂いがついたからなのか、町の野良猫は幾分かあたしに優しくなっていた。

この町の猫は、少し変わっている。かなり大人しくて、あまり鳴かない猫が多いのだ……実際あたしも、こんなに猫がいるとは思っていなかった。雄猫が夜中に唸る声なども、そういえばあまり聞かない。しかし、この裏通りだけでも猫は十匹近くいる。

あるいは、どの町でもそういうものなのかもしれない。町を作っ

たのは人間だが、その裏側には驚くほどたくさんの人間以外の生き物が住んでいる。

それにしても、夜は静かだ。まだ真夜中というわけでもないし、眠っている人も少ないだろうが、まるで物音がしない。時折、遠くを車が走り去るだけだ。

満腹になった子猫たちはお互いでじゃれあったり、あたしの足元で体を丸めている。

そのとき。

「えっ!？」

背中を這い登るようなあの感覚が、あたしの全身を貫いた。思わず立ち上がったが、子猫たちは不思議そうにそれを見ているだけだ。そして、ブロック塀の上に、見たことのない黒猫が一匹いた。

あたしは身構えて、猫の次の動きを待った。

ところが黒猫の方は、そういうリアクションが意外だったらしく、少々たじろいで首を回した。

それから、あたしに言った。

「……俺、……お腹すいた」

あたしのやり方・後編

黒猫はサーモンフレークを好きなだけ食べると、あたしの膝の上でぽつぽつと話し始めた。

「普段は食べなくてもいいんだけど……急に、魚に惹かれて……」
「へえ……」

あたしは黒猫を抱き上げてみる。普通の重さ。小動物の匂い。どれをとっても普通の猫だ。しかし胸を刺すような不安感が、相変わらずあたしの胸を締め付ける。

「それにしても、鋭いんだね」
「何が？」

「普通、遠目に見ただけでは分からないよ？ 影猫かどうかなんて」
「……お前は『影猫』っていうのね」

「うん。影の中に住んでるから」
そのまんまの名前だ。ま、仕方ない。

「お前、ひどい気配がするんだよ……単なる猫にしか見えないのに、どうして不安になるんだろう？」

「それは、『闇』の気配だよ。影猫を作る、影猫が食べる『闇』なんだ」

黒猫……影猫はそこで軽く伸びをして、あたしの肩に昇る。

「心臓から離れたほうが、気配は弱まるから」

そして、猫っぽい声でため息をついた。

「あんまり気にしないほうがいいよ。だっていっても、不安になるよね……人は大抵、闇の気配は嫌いなんだ」

「そうなの？」

「どうしても、暗い気持ちと結びつくからね」

それ以後、あたしは時々その影猫と話をするようになった。

会話するのはとても楽しかったけれど、その不安な気配はひどくあたしを混乱させた。どうにか慣れるようにはなってきたが、それを感じ取った瞬間の緊張感は、思った以上に精神を疲弊させる。それさえなければ、影猫は本当によい話し相手だった。

「他の影猫から聞いたんだけど」

その夜は忙しくて裏通りまで行けなかったので、あたしは影猫と自分のベランダで話していた。

「闇の気配に敏感な人は、自分が光の側に寄ってるんだって」「どういう意味？」

「生きてるものには、光と闇がバランスよく関わるのがいいんだけど……そのバランスは人それぞれなんだって。で、光が多く必要な人は、その分闇が嫌い……影猫にも敏感になるんだ、ってさ」

「それ、あたしがやたら変なものを見るのと関係あるの？」

「うん……死んだ人の気配は、どうしても闇寄りになる……みたい」影猫は声を潜める。それなりに、影猫としてもおおぴらに話すのは憚られる話題らしい。影猫はふっと話題を変えた。ただ、それも楽しくはない話だった。

「そういえば、保健所がまた野良猫狩りをするんだって」

「そうなの？」

「聞いた話。でも……また、影猫が増えるな」

影猫は、猫の影。

七つの命を使おうとせずに死を選んだ猫の、行き場をなくした影の猫。

あたしはその日もうらぶれた通りを抜けて、足早に帰路を急いでいた。得意先との会議を終えて、少し早めの帰宅を許されたのだ。時間にうるさくないベンチャー企業だからもらえる、ちょっとした

ボーナス休暇。もちろん、納期に間に合ったからだ。

夏の空はまだかなり青く、日没まではかなり間があるようだ。裏道の猫達も眠っているだろう。今日は子猫の好物を買っていったらどうか。

ふと横道を覗き込むと、猫が数匹急いで走っていくところだった。

「そっか……野良猫狩り、か」

悲しいけれど、あたしは奴らの飼い主にはなってやれない。どれだけ猫が好きでも、影猫と話が出来るほどでも、あたしは単なるOLで、アパートで暮らす人間だ。何十匹といえるこの街の野良猫を助けてやることなんて、出来やしない。

ところが次の瞬間、あたしはまた、ひどい闇の気配に震えた。

「お前なの……?」

物陰に向かって呼びかけてみるが、何の反応もない。あたりまえだ。影猫はただでさえよく眠るものだし、狩られる心配もないのにどうして起きてくるだろう。

闇の気配が持つひどい不安感は、容赦なく胸を締め付けた。

「ちょっと、大丈夫ですか?」

路上で立ち尽くしたあたしに話しかけてきたのは、野良猫駆除の服装をしたお兄さんだった。

「え……ええ」

首を振りながら体を動かしてみる。ひどい気配は相変わらずだが、単調な刺激なので慣れなくはない。急な腹痛と、応急処置法はそう変わらない。あたしは体を振りながら前進しようとして……慌てて、振り返った。

なんのことはない。

ひどい気配の元は、そのお兄さんだったのだ。

いつもならすぐに気付くはずなのに、あまりに強い不快が感覚を鈍らせたようだ。心配顔のお兄さんの後ろに、憎悪をむき出しにした男がぴったりと張り付いている。しかも、全く同じ野良猫駆除職員の格好で。

あたしは、気付いてしまったことによる猛烈な吐き気と戦いながら、再びお兄さんと視線を合わせた。

「今日は……野良動物の駆除ですか？」

「えっ？ ……ええ、まあ。狂犬病の予防ですよ」

あたしの方はそんな返答を聞いてはいない。質問に応じるお兄さんの意識が自我から少し離れたのを見計らって、あたしは全神経を背後の男に向けた。男の意識も、「宿主」のお兄さんと一緒に少し逸れている。その隙に感覚を研ぎ澄まして、この男をどうするか考えよう。

猛烈な憎悪は伝わってくる。事故で死にでもしたのだろうか……しかし、それ以上のことがなかなか読めない。無理矢理、入り込むようにして意識を探った（相手が人間ではないからできる技である。生きてる人間相手にやったら超能力者だ）。すると……

ところが。

「あれ？ お姉さん？」

大失敗だ。

意識がお兄さん自身から逸れたのはいいが、今度はあたしの方に向けられてしまった。

当然、男もあたしを見て……あたしは何をしているのか、しっかり見つけてしまった。

地を揺らすようなうめき声は、しかしあたしにしか聞こえないのも知っている。

男は猛烈な憎悪をあたしにぶつけて、そのまま押しつぶそうとし

た。おぞましいまでの不快感が体の表面を駆け巡り、入り込もうとする。あらゆる内臓が緊張して、すべてが逆流しそうだ。

そしてそのとき、あたしは。

何故だか分からないけれど、影猫に助けを求めている。

一つ幸運だったのは、あたしが不快感のために再び平衡を失って、路地裏に転がり込んだことだ。

おかげであたしの影が路地裏に巢食った影につながり、慌てて飛び込んできたお兄さんの影ともつながった。これで、条件は整った。突如として路地裏の影から黒猫が何匹も現れ、あたしを乗り越えて男に襲い掛かった。自分が標的ではないかと思ったお兄さんが悲鳴を上げるが、影猫の方が数倍格上だ。スピードが違いすぎる。

影猫たちは男が放つ憎悪に食らいつくと、その不快な気……「闇の気配」をどんどん吸い取っていく。男の姿はだんだん薄くなり始め、それと比較して影猫は重くなり、毛の黒色を濃くしていった。そして、男が見えないほどに薄くなってしまった後、影猫達はまた素早く動いて、路地裏の奥に消えてしまった。

お兄さんが、啞然とした顔で座り込んでいた。

あたしも同様だった。

路地裏に行くと、いつもの影猫が一匹だけ待っていた。子猫たちがいないのは、少し寂しい。

最初に会って以来、影猫は食べ物をねだらなくなった。本来、食べなくてもいいらしい。

「……人間はさー」

相変わらず影猫は、人間相手にやたら気さくに口を利く。

「いざ暗い感情に取り付かれると、自分で勝手に闇を作っちゃうんだよね」

「あの男の人……ずっと昔、狂犬病で死んだんだって」

あたしは、誰ともなしに言ってみる。

「すごく苦しかったのに、隔離されて、これまで野良犬を殺してきた報いだなんて陰口たたかれたんだって……」

「ふーん」

影猫は私の足元で、丁寧に前足を手入れする。

「ねえ。俺のこと、飼ってくれないか？」

「え？」

「あんたの影なら、楽しく暮らせそうだし。闇がまた襲ってきたら、俺が守るよ」

影猫に悪意がないのは分かっていた。闇の気配だって、拒絶反応を克服すれば気にならなくなるだろう。元々、感覚的な産物だ。けれど。

「……ごめんね、それは断らせてよ」

最初に出会った影猫は、見なかった事に出来ないなら深入りしてしまうと、そう言った。

でも……あたしは普通じゃない。この猫を影に住まわせる以外の接し方が、きつとある気がする。

だいいち……猫を飼っておいて、その代わりに助けてもらうなんて、性に合わないではないか。

あたしはどうやら、見てはいけないものを見る回数がひどく多い。それは、見られない世界と繋がりながら生きていくに等しいかもしれないけれど、

その世界に入り込んでしまうことではない。

それによって、狩られる子猫を守れるとしても。

あたしのその力は、そんな大義名分を実行するためのものなんじゃない。

ただ、欲するままに。人と違うからこそ、人との差異をプラスに使う。

それがあたしのやり方だ。

再び俺の受難

志望大への合格通知は、なんという事のない紙切れ一枚だった。そこに書かれた文字と学長のサインを求めて、俺は今まで勉強にいらして、憧れのメディア業界へ進出するためのワンステップなのだ。詰め込まれた英単語や経済用語がやっと使い道を与えられ、単純作業が報われる日が来るのである。

受験勉強から開放された最初の感想はそんなものだったが、暇になった体を休ませれば再び気力がわいてくる。きちんと知識を吸収して、憧れのメディア業界へ進出するためのワンステップなのだ。詰め込まれた英単語や経済用語がやっと使い道を与えられ、単純作業が報われる日が来るのである。

学校への報告を終えて、俺は今日も坂を上って帰路につく。

……卒業式では泣かなかった。けれど、いくら泣いてもおかしくないような気分だった。クラスはてんでまとまりがなかったし、担任はハゲだったし、クラスメートも馬鹿ばかりだったけれど、それでもそれなりに楽しかったのだ。坂の上から毎日見つけた街も、気付けば冬を越え、少しずつ緑色に近くなっている。

なんてセンチメンタルな。それも、ありきたりの。

俺は公園に入ると、フェンスに張り付いて昼下がりの街を眺めた。薄水色の空にはまだ冷たそうな濃い雲が浮かび、海は空よりも濃い色で町の向こう側に落ちていく。

そうだ。

来月、俺はここにいない。

「……にゃ」

突然の猫の鳴き声に、俺が振り返ると。

見た事のない小さな黒猫が、ベンチの下から覗いていた。

俺が近寄ってみると、黒猫は逃げずに再び小さく鳴いた。耳の横を触ってやると、かすかに喜んでいる素振りを見せる。首輪はしていないが、飼い猫かもしれない。

「いい子だな」

黒猫は気持ちよさそうな仕草をするが、ベンチの下から出て来ようとはしなかった。

俺はふと、思いついたままに言ってみる。

「お前、俺の影の中に住んでみたりしないか？」

パサッ、と、俺の後ろで何かが落ちる音がした。

俺が振り返ると、近所の中学校の制服を着た女の子が立っていた。足元に手提げ鞆が落ちている。

「どうして……知ってるの？」

「にゃ」

猫は軽く鳴いて、ベンチの下から俺の影の中に移った。女の子が近寄ってくると、さらにその影の中に入って満足そうに座った。

「君が飼ってたんだ」

「う……うん。あ、あのっ」

彼女が聞きたいことは大体分かったから、俺は静かに言った。

「俺も昔、飼ってたことがあるからさ」

それから俺はベンチに座って、その名前も知らない女の子に、あの奇妙な猫の話をした。俺の影に急に住み着いたかと思ったら、俺の生活リズムを崩して、だけど最後には助けてくれた、影の中に住む猫の話……

彼女は俺の話をじっと聞いていたが、不意にこう言った。

「ねえ、これから行くところについてくる？」

女の子は俺を引っ張るようにして、街の一角にある路地裏に連れてきた。

夕暮れの路地裏はしつかりとした影に包まれていて、彼女の飼っている影猫はすいすいと奥の方へ進んでいく。

「ここは？」

「待ち合わせしてたの」

彼女は楽しそうに奥へ入っていくので、俺も続いた。

「よ、こんばんわ」

奥にいたのは女性で、ごくごく普通のOLに見える。ま、彼女は普通の中学生だし、俺も普通の高校生に見えるだろうから、別におかしいことではない。

「あれ？ 今日はお連れさんがいるのね」

「昔、飼ってたことがあるんだって」

彼女のその言葉だけで、女の人は理解したらしい。

「そう。じゃ、懐かしいのかな？」

気がつくと周囲にはたくさんの黒猫がいて、俺のほうに興味ありげに見つめていた。

それに、もっと俺を驚かせたのは……それらが皆、俺の分かる言葉で何かを話している、という事である。

彼女は女の人の脇に立って、楽しそうに世間話をし始めた。学校でのこと、最近の先生が面白くないこと、少し気になっている頭のいい男子生徒が最近元気がないこと、家でのこと、自分の影猫の話……俺は自分が中学生のときに、そんなにたくさん話すことがあっ

たのかどうか、少し思い出してみようとした。

「ねえ、君の話も聞きたいな」

女の人がそう言うので、俺は仕方なくさっきの話を繰り返す。ただ今度は、俺も日頃のことを織り交ぜながら話すようにしてみた。なんだか、ひどく和やかな時間だった。

「ねえねえ、面白い話して」

彼女が女の人に問いかける。

「ほんと好きなのね……毎度幽霊の話なんてつまないでしょ？」

「おねーさんはしょっちゅう見てるからそう思うんだろうけどーっ」

「分かった分かった」

髪をかき上げて、

「そうね、それじゃ随分昔の事だけど。夜道を歩いてたら吸血鬼と出くわして……」

俺はなんとなくその話を聞きながら、膝の上に乗ってきた影猫を撫でてみる。

どうやら世界には、俺とは全然違う生き物がたくさん住んでいるらしい。

ただ俺は……偶然それと関わりあうことになったわけ。

それが、平凡な俺が出せる、唯一の結論なのだ。

再び俺の受難（後書き）

長らくお付き合いありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8687b/>

影猫（かげねこ）

2010年10月8日15時56分発行